

公園をみる・観る

～公園の天国と地獄～

2015年が明けた。寒の最中とは思えぬ暖かい陽気に誘われて園路に出て見る。

中央園路を歩くと風も無く背中に受ける冬陽がぼかぼかと気持ちいい。「暖かいね」「春も近いね」などと言合いながらご機嫌な気分になる。「アレッ ここにあったタヌキのトイレは？」いつもタヌキが用を足していた場所がきれいになっていた。タヌキはどうしたのだろう。



枯れて褐色に染まったアシ原に目を向けるとアシ原の中に黒い小さな影がスッ、スッと動いている。じっと目を凝らすと小鳥たちがアシの枯れ茎を縫うように飛び交っているのだ。右へ、左へ、高く、低く、アシの茎をよけ、仲間を避け、忙しそうにでも楽しそうに数十羽のメジロやツリスガウたちが飛び交っていた。早春を思わせるこの日、それはまるでアシのスタレに遮られた小鳥遊（たかなし⇒怖いタカがいなくて小鳥たちが存分に飛び遊べる環境を表す。人名にも遣われている）の国を見ているようだった。のどかで楽しげな小鳥たちの群れ遊ぶ光景に私達も幸せな気持ちになれた。小鳥たちはきっと「ここは私たちの安全な居場所、私たちの天国よ」と言っているに違いないなどと話しながら先へ進む。クリークに突き当たって左折すると、枯れ草色の中、コケ類が鮮やかな緑色を誇り、コアカミハナゴケの繁殖用子器の赤色が点々と彩を添える場所があり目が和む気がした。観察棟から再び左折してトンボ池へ。イヌコリヤナギの発芽状態をチェックすると春はもう少しと知れた。ピオトープでニホンアカガエルが産んだ卵を見てやっぱり春が近づいていることを感じながらピジター

センターへの帰路に着いた。少し歩くと道の両側2箇所にも大量の薄黒色の羽が散乱していた。「この羽はオオバンのものであるだろう、おそらくオオタカがクリークにいたオオバンを襲ったに違いない。クリーク側に散らかった羽は最初に襲ったときのもので、道を跨いだところで一度落としたため樹林帯側にも羽が散乱したのだろう。羽の状態から見て惨劇があってからまだあまり時間がたっていない」とはトリに詳しいボランティア仲間の名推理。私たちが中央園路で小鳥の天国に見とれていたところ、対面の西側園路ではオオバンとオオタカによる地獄絵図が繰り広げられていたということだ。オオバンとオオタカの命をかけた戦いのさまを思い描くと、西側園路に入るところから陽射しが翳り冷たい風が吹き始め冬の寒さを感じ始めたのが、たまたまのことではないような気がした。自然は美しく、楽しく、優しいが同じくらいに厳しく、冷たく、残酷でもある。年の初めに改めて突きつけられた自然界の定まりに肅然とする思いだ。トンボロードまで帰ってくるとタヌキの大きな大きなトイレがあり「移動トイレだったんだ」と納得した。

(土×土)